平成 27 年度「インクルーシブ教育システム構築モデル事業(学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進)」
成果報告書

団体名	茨城県教育委員会

Ⅰ　概要

１　事業の概要

本県では、交流及び共同学習推進事業に関するパンフレットの配布や研修会の実施等による理解啓発を行い、交流及び共同学習の推進を図っているところである。

このような中、すでに交流を実施している学校については継続的に交流を行い一定の成果を上げている一方で、交流の必要性や意義等に関して理解啓発を進め、その重要性を各学校で再認識し、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒がより広く活発に交流できるよう、交流活動の内容や方法についてさらに工夫・改善していく必要がある。

そこで、2019 年に本県で開催される全国障害者スポーツ大会や、翌 2020 年のオリンピック・パラリンピック東京大会を契機に、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒の、両者にとって大きな教育的効果が見込まれる「障害者スポーツ」を交流活動の内容に取り上げ、スポーツの楽しさを共に味わうことによって、障害者スポーツの理解啓発を図るとともに、障害のある人の社会参加や障害に対する理解を深め、社会性や豊かな人間性を育んでいく。

２　事業の成果

１　障害者スポーツ（フロアバレーボール）をとおした学校間交流

盲学校と交流を行った中学校、高等学校の生徒は、視覚に障害のある特別支援学校の生徒が視力に関係なくスポーツを行う姿を見て、驚きとともにスポーツに取り組む姿勢に障害は関係のないことを感じることができた。また、視力の状態による接し方や言葉のかけ方などを学ぶことができた。

（１）中学校２校（交流回数　各１回）

中学校の生徒との交流は、お互いを知る機会としての対面式で学校紹介や自己紹介の後、フロアバレーボールの競技やルールの概要説明を実施した。また、盲学校の生徒によるデモンストレーションやサーブ・アタック・レシーブの練習を一緒に行った後、短時間での交流ゲームを行った。盲学校の生徒は、得意なプレーを見てもらうことができ、自己肯定感や自己有用感を高めることができた。また、中学校の生徒は視覚に障害のある生徒の迫力あるプレーを見ることで、盲学校の生徒も自分たちと同じように、勉強だけでなくスポーツにも取り組んでいることを知ることができた。

（２）高等学校（交流回数２回）

上記と同様の対面式や基本の練習、交流ゲーム等以外に、茨城県フロアバレーボール協会より講師を招き、デモンストレーションや技術指導など障害者アスリートとの体験交流会を実施した。また、全国大会等で活躍する社会人チームを招き、エキシビジョンマッチを実施した。いずれも、技術の高さや戦術の巧みさ、または競技の激しさや面白さを生徒が実際に体感することができ、その後の体験活動に興味をもって意欲的に取り組むことできた。

対象校は、スポーツ全般に係る将来の人材育成の観点から体育系学科を有する学校とした。障害者スポーツに関する学習や実際の体験をとおして見識を広めることができ、スポーツに関わる人材としての資質を高めることができた。

２　障害者スポーツの体験

盲学校と交流を行った中学校、高等学校の生徒は、パラリンピック並びに全国障害者スポーツ大会で開催されている以下の競技を体験した。

・ゴールボール（パラリンピック競技）

・サウンドテーブルテニス（全国障害者スポーツ大会競技）

いずれも音を手がかりに行う競技であり、その難しさや競技を行う上で必要な能力などについて体感することができた。また、スポーツに限らず、ルールや道具などの創意工夫、必要な支援をすることによって、種々の困難も実現可能になることを実感する契機となった。

３　出前授業

学校間交流の事前学習として、盲学校の教員が中学校、高等学校において授業を行った。

（１）時数

ア　中学校１校（1 単位時間）

イ　高等学校１校（2 単位時間）

（２）内容

ア　盲学校の概要（教育課程、授業の様子・内容、施設設備など）

イ　視覚障害による見え方、必要とされる支援

ウ　オリンピック・パラリンピック

エ　障害者スポーツの意義

オ　障害者スポーツの紹介

カ　学校間交流の内容

障害に関することや障害者スポーツについて事前に学ぶことで、実際の交流を円滑に行えただけでなく、学んだ知識を交流の際に活用したり発展させたりすることできた。中学校、高等学校の生徒が、障害者と関わることは初めてであったが、接し方への不安感などを解消し、交流を実施することができた。

４　パラリンピアン・障害者トップアスリートによる講演会

日本代表として国内外で活躍する選手を招いて、講演会を実施した。

（１）講師

高田裕士 選手(陸上競技：聴覚障害)

エイベックス・ホールディングス株式会社所属

400m ハードル日本記録保持者、デフリンピック日本代表

高田千明 選手(陸上競技：視覚障害)

ほけんの窓口グループ株式会社所属

100m、走り幅跳び（いずれも日本歴代２位)、各種国際大会日本代表

（２）演題及び内容

「障害者アスリートの競技生活と現状」

〈主な内容〉・日本代表として国際大会で活躍する競技生活の実際

・障害者アスリートを取り巻く日本国内の現状と課題

・中学生・高校生へのメッセージ

講師は、陸上競技で国際的に活躍する夫婦である。聴覚障害のある夫と視覚障害のある妻が、互いの競技生活や家庭生活をどの様に両立し競技と向き合っているかなど、実生活の様子を交えた話の中で、競技生活に取り組む際のサポートスタッフ等とのコミュニケーションの重要性と大切さを知ることができた。また、障害者アスリートの競技生活の現状を諸外国と比較しながら、我が国の障害者スポーツの現状と課題についても話題とした。生徒は、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、どのような活動や取組、または意識や考えが必要かを知り、今後の生活を考えることができた。

３　事業の課題とその解決のために必要な取組

１　新たな課題

（１） 生徒が、より意欲的で主体的に取り組める展開の工夫や学校間の連携

限られた時間の中での交流であったが、出前授業により特別支援学校の児童生徒の様子や障害者スポーツの概要等についての情報提供をしたことで、中学校、高等学校の生徒が見通しを持って事業を展開することができたが、さらに充実させるために、出前授業や相互の事前学習、事後学習の時間を確保する必要がある。

（２）地域への発信

講演会は、会場が大学内の講堂であったこともあり、地域の人々の参加が難しい状況であった。講演会講師の決定とともに、開催期日の決定と会場の確保を早期に行い、多くの地域の方も参加できるような計画が必要である。

２　今後にむけて

（１）活動内容の精選と交流時間の確保

交流会の前半には、スポーツ以外の交流（点字体験等）も取り入れている。障害の状況によっては、一緒にスポーツを取り組むことが難しい児童生徒もいるため、スポーツ以外の内容も重要であるが、交流の回数が少ない。時間配分や交流内容を精選する必要がある。また、中学校2校は、障害者スポーツを1回体験しただけで今年度は終えている。年度初めから計画を立案し、双方の学校行事等を調整し、交流時間を確保したい。

（２）事前学習及び出前授業の充実

円滑な交流活動となるよう、中学校、高等学校における事前学習の内容と出前授業を充実する必要がある。具体的には中学校、高等学校での単元計画の中に出前授業を盛り込み、単元目標と整合性のある出前授業の内容としたい。単元計画にあたっては、学校間での連携を充実させたい。

（３）地域への発信強化

東京オリンピック・パラリンピック及び全国障害者スポーツ大会茨城大会を鑑みた際障害者スポーツに関する地域への発信は必要不可欠である。講演会の会場として、地域の市民会館やスポーツ施設を設定し、障害者スポーツを体験できるような会場を確保したい。

（４）検証の方法

対象になる子供たちに対して事前事後の調査をする等、交流によって障害のない子供の障害者理解が深まったことや、子供たちにどのような変化があったのかを検証できるようにする必要がある。